時評

わたしは作中人物じゃないですよ

佐藤博之

「わたしは作中人物じゃないですよ」と書いた缶バッジを俳人の石原ユキオ（twitter:@yukioi）が作成した。「Sisterlee（シスターリー）」には石原の開発動機が以下の様に綴られている。「（句会に於いて）作者が明らかになった際に作者本人と作品のギャップに言及したり、俳句の内容にちなんで冷やかしたりする場面を何度も見てきた」「この手の作中人物と作者の混同は容易にセクシャルハラスメントに結びつく」「たとえセクハラに至らなかったとしても、作中人物と作者を混同してかかるのは迷惑になり得る。作品に絡めて私生活を詮索されてはたまらない。（中略）作者のプライベートに無遠慮に踏み込まないよう批評の場では十分に注意したい。そんな思いからこのメッセージは生まれた」と。

句会の中で作中人物を作者と結び付けて俳句の内容で作者がからかわれたり私生活を詮索されることの被害を防止するために、この缶バッジを作られたとのことである。令和二年五月から一年二ケ月ほどの間に約百個が売れ、プレゼント企画などで積極的に拡散しているそうだ。

勿論これは俳句だけの問題ではなく、作者の生活をより詠み込みやすい短歌にも大きな問題になり得る。事実、この歌は作者のどの様な経験を元にして詠まれたのかという様な質問は歌会後の二次会等ではしばしば聞かれる会話であるし、歌会中に出たスキャンダラスな解釈を作者発表後に作者へ蒸し返されるのも見た。

ここで問題になるのは二点、作中人物を作者と結び付けることの是非と、作品内容を元にしてのハラスメント問題である。

作歌の際に歌人が自分やその周りのことを詠むことは多く、作中人物と作者が一致（含部分一致）することも多い。しかしそれが全てではないため、作中人物と作者を完全一致させて解釈することは読みを狭める一因になり得る。想像の余地のある歌は、面白い。卑近な詮索は、その想像の余地を狭めて歌を委縮させる。作者の人物像を離れて読まれることで得る大きな可能性は、作者なりの背景を重ねる読み方と両軸として常に意識すべきだろう。

問題が大きいのはハラスメントである。歌会に限らず公に人の集まる場に於いて一切のハラスメントの根絶を目指していくことは、その結社なり各歌会の義務である。ハラスメントを発する側では悪意のない言動でも、時には人を傷つけるハラスメントとなり得るということは全ての参加者が自覚すべきである。強いて言うとハラスメントの大半は無自覚と黙認が主因である。万が一悪意なくハラスメント的な言動が出てしまった際には、それを指摘、せめて被害者のフォローと併せて何らかの形で発言者に伝えることのできる様に、結社全体で目指していきたいと思う。

勿論すぐに全てのハラスメントを即座に根絶させることは難しい。この小さな缶バッジを契機に、作者と作中人物を結び付けることで嫌な思いをする人が少なからず居ることを一つのケーススタディとして、皆でハラスメントに対する意識を向上させていきたいと思う。私自身の自戒と決意を込めて。